1|ミルグラム監獄内尋問室

薄暗い尋問室の中。
フータ 「ふぅー……ふぅー…..」
椅子に座っているフータ。止まらない貧乏ゆすり。
気持ちを押さえつけるように、荒く息をする。
フータ 「……くそが！」
激しく床を蹴りつけるフータ。
エス 「……随分な荒れ様じゃないか。囚人番号3番、フータ」
いつの間にか尋問室の入口にエスがいる。
一瞬の驚きの後怒りに震えるフータが口を開く。
フータ 「……誰のせいだと思ってんだクソガキが……」
エス 「僕は看守だ。言葉遣いには気をつけろ」
フータ 「ナメんじゃねぇぞっこんなところに連れてきて偉そうにしやがって……！」
エス 「どうした？震えているぞ」
フータ 「やってやる……やってやるよ……っ！！」
椅子から立ち上がり、エスに向かって走るフータ。
エス 「！」
フータ 「うぉおおおお！！」
エスに殴りかかろうとするが、ギリギリで見えない壁にぶつかったように拳が止まる。
フータ 「な、なんだこれ……見えない壁がある……」
エス 「ほう、理屈はわからないがジャッカロープが言っていたのはコレか。"囚人から看守への攻撃はできない」
フータ 「……な、なんだっつうんだよ。現実じゃねぇのかここ……」
気が抜けてぺたりとへたり込んでしまうフータ。
エス 「無害とはいえ、感心しないな。看守への攻撃行動、とて悪印象だ」
フータ 「こ、こんなふざけた場所へ閉じ込めた奴が何言ってやがる！立派な正当防衛だ！」
決死の形相のフータを見て思わず、笑みがこぼれるエス。
フータ 「……フ、フフフ……」
笑い出したエスを見て、馬鹿にされた怒りと恐怖が入り交じるフータ。
フータ 「な、何を笑っていやがる！」
エス 「いや、すまない……こっちの話だ」
フータ 「な、何なんだテメェ……」
エス 「まぁー旦座れ、フータ。尋問を始める」
フータ 「……」
戸惑うフータ
エス 「どうした？腰が抜けて立てないか？」
フータ 「ばっ、バカにすんじゃねぇ！」
立ち上がり、ふてぶてしくドカッと椅子に座るフータ。
フータ 「そもそも俺は自分が囚人だなんて認めてねぇ！こんなワケわかんねぇ場所に連れてくるなんてジンケン侵害だ！」
エス 「自分を囚人だと認めていない、か」
フータ 「当たり前だ！ムジツの人間を拘束して監禁するなんざ、テメェの方がよっぽど犯罪者じゃねぇか！他のヤツらはなんでか素直に受け入れてやがるが、俺はごまかされねぇぞ」

エス 「それはおかしいな。お前らは全員『ヒトゴロシ』だと聞いている」
フータ 「……しらねえ。誰が言ってんだそんなこと」
腕を組み、目をそらすフータ。
エス 「思い当たるフシもないと」
フータ 「当たり前だ。名誉キソンだろそれ」
エス 「しかしヒトゴロシという言葉が出た瞬間に腕を組みだしたな。これ以上踏み込んでほしくないか」
フータ 「は、はあ？」
慌てて腕をほどくフータ。
構わず推理を続けるエス。
エス 「囚人ではない、と僕に殴りかかるほどだ。日本の法律を犯していない、という自信があるんだろう」
ブータ 「そ、そういってんじゃねぇか」
エス 「しかし、『ヒトゴロシ」には反応した。立件はできない。犯罪ではない。ただ……人は殺した……」
フータ 「……」
エス 「目をそらしたな」
こくん、と息を呑むフータ。
フータ 「……はん、バカバカしい。的外れだぜ」
エス 「話し始める前に唇を舐めたな。緊張している証拠だ。嘘を付き慣れてないのか？」
フータ 「……！いい加減にしろテメェ！！！」
椅子を倒し、立ち上がるフータ。
フータ 「……ふーっ。ふーっ」
殴りかかろうとするが思い出し、止まる。
エス 「頭に血が昇ると、暴力が無意味だということまで忘れてしまうのか？」
フータ 「……汚ねぇぞ、てめぇ……」
エス 「ちなみに、教えといてやろう。しぐさや反応で心理が読めるなんてことは、ありえない。それらしい話に簡単に騙されないようにな」
フータ 「こ、こ、こいつ……」
あまりの怒りに唇を震わせるフータ。
エス 「残念ながらお前の言う人権侵害も、監禁も、名誉毀損もミルグラムではまったく問題にならない。ここはそういった理の外にある」
フータ 「……そんなこと、認められっか……」
エス 「自分の立場をわきまえろ。何を言おうとお前は『ヒトゴロシ』の囚人だ。決して逃げられない。お前に判決がくだるまではな……」
椅子に座り直すフータ。
気が抜けたのか、顔を手で覆う。
フータ 「くだらねぇ……。俺は殺してねぇ……殺してねぇんだ……」
エス 「……ふむ」
興味深そうにフータの様子を眺めるエス。
ワーダ 「愛してねぇ……してねえよな……」
エス 「フータ」
フータ 「あんだよ……」
エス 「先に述べたミルグラムの性質上、お前の 「ヒトゴロシ』も、今の時点では問題にはならない。僕はそのことでお前を責める気もない。一旦落ち着くと良い」

エスの言葉を反芻し、ごくりと生唾を呑むフータ。
フータ 「……は、ははっ殺してねぇっつうの」
安心して、空笑いのフータ。
エス 「どちらでもいいさ。いずれ、ミルグラムの力でわかる問題だ。お前の心象を覗くことになるからな」
フータ 「プライバシーの侵害だろ……。フザけんなよ……」
エス 「お前にとっては好都合だろう。本当に人を殺していないんだったらそれを証明できるんだ」
フータ 「……そうだけど、よ……」
エス 「安心しろ。ミルグラムは……まぁ、僕もかな。別にお前の敵じゃない。たとえ法律を犯していても、人を殺していてもミルグラムで赦すと判断されれば赦される。ある意味、フラットだろう」
フータ 「……」
エス 「まぁ、お前の味方というわけでもないけどな」
小さくつぶやくエス。
少し落ち着いた様子のフータ。
フータ 「ふぅーー……」
エス 「落ち着いたようだな」
フータ 「現状どうしようもねぇからな。出口は見当たらねぇし、力づくでも通用しねぇときたらな……」
だ息を整えたのちエスに向き直るフータ。
フータ 「おい、エス」
エス 「言葉遣いに気をつけろと言ったはずだが」
フータ 「うるせぇ、どうせ俺より年下だろ」
フータの物言いに呆れるエス。
エス 「……やれやれ、野蛮人め」
フータ 「ここはなんなんだよ。何の目的で俺たちを捕らえてんだ」
エス 「答えるつもりはない。お前たちはただ髪で生活をしていればいい」
フータ 「……おい、囚人だからってナメんなよ。刑務所の中の人権侵害とか、今どき問題になってんのしらねぇのかよ！」
エス 「なんだ、囚人だということは認めたのか？」
フータ 「言葉のアヤだバーカ！」
取り合わないエス。
エス 「こちらからの質問をするぞ。監獄内の生活はどうだ？」
フータ 「どうもこうもねぇよ。スマホもPCもねぇし。現代人かHらネットワークを奪うなんてどうかしてんじゃねぇのか」
エス 「他の囚人との関係性はどうだ？」
フータ 「別に……。でも変なヤツらだよ。なんでか落ち着いてるヤツも多い。こんな状況だっつうのに……」
エス 「ふむ」
話し出すと止まらなくなるフータ。
フータ 「特に気に食わねぇのがシドウとカズイのおっさんコンビだな。この緊急事態だっつうのに。年長者のくせにノンキにしやがって頼りねぇたらありゃしねぇ」
エス 「そうか」
フータ 「ま、ハルカもミコトも全然だけどな。俺が引っ張ってい反かなきゃなんねぇ」
エス 「ふぅん……」

フータ 「そもそもオンナは頼りにしてねぇしな。代表してガツンと言ってやるよっつって、今回も俺が来てる訳よ」
エス 「あぁ、それであんなに興奮してたのか。しかし、代表の割にやけに震えていたな」
エスの言葉に少し言いよどむフータ。
フータ 「いや、それは、ユノのヤツが......尋問室でとんでもねぇ暴力を受けたってて言ってたからよ。武者震いってやつだよ......！」
エス 「ユノ......律儀にやってくれたんだな」
フータ 「なんか言ったかよ」
エス 「特に何も」
リラックスした様子のフータを見つめるエス。
エス 「しかし、よく喋るようになったじゃないか」
フータ 「は？オマエが質問してきたんだろうが」
エス 「最初はよっぽど怯えていたのだろうな。先制攻撃することで、それを誤魔化す。そうして自分を守ってきたのだな」
エスの言葉に、ピリつく空気。
フータ 「......あぁ？ケンカ売ってんのかよ...」
エス 「僕がお前を判断するために必要な評価だ。気を悪くするな」
フータ 「おいおいおいおい！偉そうに人を評価してんじゃねぇぞ！違法行為だらけのヤツがよ！」
フータ 「ここを出たら絶対に訴えてやっからな！お前も！ただで済むと思うなよ！」
エス 「ふぅん」
フータ 「俺は悪いやつは許さねぇ！このミルグラムとかいう場所も、絶対に潰してやる！」
フータの言葉に目を丸くするエス。
エス 「僕が“悪いやつか。その発想はなかった。ではフータ、お前は正義か」
フータ 「たりめぇだろ！悪をぶっ潰すのが正義だ」
考え込むエス。
エス 「......正義が、人を殺したのか？」
フータ 「......ッ！殺してねぇ！」
エス 「では思考実験だ。どう思う。正義のための殺しは赦されるか？」
フータ 「......赦される......。赦されるに決まってる......」
思考に没頭するエス。
エス 「興味があるな......。果たして、正義は赦されるのか、悪、罪、そこに因果関係はあるのか」
フータ 「おい、何ぶつぶつ言ってやがる」
突如部屋にある時計から鐘の音がなる部屋の構造が変化していく。
フータ 「な、なんだ！何が起きてやがる！」
エス 「......時間か。見せてもらうよ、お前の正義」
フータ 「歌を抽出するってやつか。けっ、好きにしやがれ......」
エス 「そうさせてもらおう。何か言い残したことはあるか？」
フータ 「言い残したことね……おい、エス」
エス 「なんだ？」
フータ 「なんで笑ってやがった？」
エス 「ん？」
フータ 「最初の方！こっちの話だ、とかいってはぐらかしてただろ！ああいうのモヤモヤして気持ち悪いんだよ」
エス 「あぁ......」

エスの顔に笑みが浮かぶ。
エス 「あまりに囚人らしい囚人だったもので、正直、少し嬉しくなった。おかげで、いつもよりはりきって虐めてしまったかもしれないな」
フータ 「はぁ～～～～～！」
エス 「楽しかったよ、ありがとう」
フータの肩に手を載せるエス。
エス 「囚人番号3番、フータ。さぁ。お前の罪を歌え」